

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720261

研究課題名(和文) 第二言語における定型表現の習得と処理およびその英語指導への導入のあり方について

研究課題名(英文) The acquisition and process of formulaic sequences in L2 and the implications for teaching

## 研究代表者

奥脇 奈津美 (OKUWAKI, NATSUMI)

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：60363884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語学習者による定型表現(FS: formulaic sequences)の使用を研究したものである。第二言語(L2)能力の発達に伴って、その知識と使用がどの程度発達するのかを検証した。言語習得への影響、特に語彙力やL2習熟度との関連性について調査するため、71名の日本人大学生から英文エッセイ2種類のデータを収集し、使用されたFSについて分析した結果、語彙力やライティング力は熟達度の上昇に伴って向上するが、FSにはそのような発達がみられなかった。このことから、本研究では、FSの言語使用における重要性、その習得の難しさ、教授項目と位置付けることの必要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This study investigates how formulaic sequences (FS) are used by second language (L2) learners and discusses whether its knowledge develops along with L2 proficiency. 142 short essays written in English by 71 Japanese learners were examined in terms of FS, and the degree to which they produce different types of FS is investigated. The result showed there was a relationship between the use of FS and essay quality, but no association was found between FS use and L2 proficiency. This was taken as suggesting that there is a threshold of L2 proficiency below which little relationship between the use of FS and L2 proficiency is observed. It was suggest L2 learners need to develop their L2 knowledge enough before they are able to use FS adequately and successfully. Since this is the area where its development is very slow and its acquisition cannot be achieved in an automatic way, an instruction specifically targeted to this area is necessary.

研究分野：人文学

キーワード：第二言語習得 定型表現

## 1. 研究開始当初の背景

応用言語学の分野において、定型表現 (FS: formulaic sequences) に注目した研究が活発に行われていた。コーパス言語学の発達に伴って、言語使用における定型表現の占める割合の大きさが明らかになり (Sinclair 1991; Cowie, 1998; Erman and Warren, 2000) その定義や種類に関する議論は盛んであった (Wray, 2002; Schmitt, 2004; Wood, 2010)。第二言語習得研究においては、1970年代から、定型表現は初期段階には記憶され、後に、分析されて文法発達を促進するものになるという研究があり (Hakuta, 1974; Fillmore, 1976; Myles et al, 1998; 1999)。コロケーションについては、上級レベル第二言語話者になっても難しい領域であるとの研究が多かった (Granger, 1998; Howarth, 1998; Nesselhauf, 2003; Siyanova & Schmitt, 2008)。また、学習者の使用する表現には、母語話者に比べて過剰使用 (overuse) される表現と、過少使用 (underuse) される表現があることも明らかになっていた (Granger, 1988; Milton, 1998; Foster, 2001)。2000年代以降は、それまで、コーパス研究や習得研究において主に行われてきた記述的研究を基盤に、心理言語学的手法を用いた実証研究が活発になってきた。特に、複数の語がひとつのまとまり (チャンク) としてメンタルレキシコンに蓄えられているのか、まとまりとして言語処理がなされるのかなど、人間の言語使用に定型表現が繰り返しみられる現象について、その心理的実在性が研究されはじめていた (Schmitt, Grandage & Adolphos, 2004; Schmitt & Underwood, 2004; Underwood, Schmitt & Galpin, 2004; Jiang & Nekrasova, 2007; Conklin & Schmitt, 2008; 村木 & 杉浦, 2008)。そのような背景の中で、第二言語習得における FS 使用とその発達を調査することにした。

## 2. 研究の目的

本研究は、FSの言語使用における重要性、その習得の難しさ、FSを教授項目と位置付けることの必要性を明らかにしようとしたものである。日本人英語学習者が、FSをどのように使用し、それが第二言語能力 (一般的能力、語彙力 (サイズと深さ)、ライティング力など) と関連するのかどうかを検証することを通して、第二言語発達における FSの習得を明らかにすることを目的とした。また、言語における高頻度にパターン化した表現の役割について、第二言語の観点からその重要性を検証することも目的とした。

## 3. 研究の方法

- (1) 第二言語学習者の FS 使用を調査するため、日本人大学生の英語学習者 71 名から英文エッセイデータを 2 種類集め (計 142 エッセイ)、その中で使用された FS のタイプや頻度を分析した。FS がより使用されやすいタイプのエッセイについて調べ、また、エッセイの評価が使用された FS の頻度やタイプに影響されるかどうかも調べた。

英文エッセイのトピックとして、「描写型エッセイ」と「議論型エッセイ」の 2 種類を課した。それぞれ 30 分で 200 語程度書くことを求めた。

英文エッセイの評価を英語母語話者である英語教師 2 名に依頼した。評価基準として the ESL Composition Profile (Jacobs, Zingraf, Wormuth, Hartfiel, & Hughey, 1981) を使用した。2 名が同様の評価を与えたものについてのみ、データとして使用し、そのスコアを学習者のライティング力とした。

Ohlrogge (2009) によって提案された FS の 8 タイプの中から、本研究の目的に合致する下記の 5 タイプを使用した。

- 1) Collocations
- 2) Idioms
- 3) Phrasal Verbs
- 4) Personal Stance Makers
- 5) Transitions

5 タイプへのカテゴリー分けについて、英語母語話者の英語教師 2 名に依頼し、両者の意見が一致するものについてのみ FS と認定し、データとして使用した。

- (2) (1)と同じ 71 名の参加者から、英語能力テスト (TOEIC) と語彙テスト 2 種類 (サイズ: 望月テスト (望月, 1998) 深さ: Word-Associates Test (Read, 1993) のデータを収集し、(1)で得られた FS に関するデータとの関連性を調べた。

英語能力テストのスコアとライティング力 (英文エッセイのスコア) との関連性

英語能力テストのスコアと語彙テスト (サイズと深さ) のスコアとの関連性

英語能力テストのスコアと FS 使用数との関連性、また、FS タイプとの

## 関連性

語彙テストのスコアと FS 使用数との関連性、また FS タイプとの関連性

### 4. 研究成果

研究の結果、以下の6点が明らかになった。

- (1) ライティングのトピックのタイプによって、使用する FS の頻度が異なる。

1人あたりの FS 使用の平均は、描写型エッセイでは 2.97 個、議論型エッセイでは 6.14 個であった。ウィルコクソンの符号付順位和検定の結果、後者のほうが前者よりも FS 使用数が有意に多いことがわかった ( $z = -6.451$ ,  $p < .001$ )。これは、エッセイのタイプによって使用される FS に違いがあることを示す。議論を必要とするタイプのエッセイのほうが、事実を描写するタイプのエッセイより、学習者の FS 使用を促すことができるということがわかった。

**表1 FS 使用数**

	描写型		議論型		z 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
FS	2.97	1.919	6.14	2.789	-6.451**

\*\* .01 レベルの有意差

教育的示唆として、描写型の英作文だけでなく、議論型の英作文を書くことによって、より多くの FS を使う機会を与えることができる。

- (2) 使いやすい FS タイプ、ほとんど使用されない FS タイプがある。

全体の使用として、Collocations や Transitions、Personal Stance Makers の使用頻度が高く、Idioms や Phrasal Verbs はあまり使用されないことが分かった。また、エッセイのタイプによって使用するタイプが異なる。

**表2 FS タイプ**

	描写型	議論型
Collocations	63 (29.62%)	206 (47.5%)
Idioms	3 (1.42%)	11 (2.52%)
Phrasal Verbs	1 (0.47%)	12 (2.75%)
Personal Stance Makers	40 (18.96%)	128 (29.36%)
Transitions	104 (42.29%)	79 (18.12%)

知識としてはもっていても、実際にライティングするときに、学習者が自らあまり使用しない FS があることがわかったので、指導の際には、そのような項目を使うよう意識させることが大切である。また、さまざまなタイプのエッセイ課題を与えることにより、内容に応じて多様な FS を使うことになるので、FS を学ぶ機会となるだろう。

- (3) ライティング力と第二言語熟達度とは関連する。

ピアソンの相関係数で計算したところ相関があった(描写型:  $r = 0.48$  ( $p < .01$ ), 議論型:  $r = 0.56$ , ( $p < .001$ ))。これは、熟達度が高い学習者のほうがライティングでも高い評価を得たことを示している。参加者を習熟度別に2グループに分けて  $t$  検定を行ったところ、グループ間に差があった(描写型:  $t = 2.416$  ( $df = 46$ ,  $p < .05$ ), 議論型:  $t = 3.836$  ( $df = 55$ ,  $p < .001$ ))。これは、L2 能力が向上するのに伴い、L2 ライティング力も向上することを示している。

- (4) ライティング能力と FS の使用頻度には関連がある。特に、コロケーションを適切に使うことが良い評価につながる。

スピアマンの相関係数を計算したところ関連性があった(描写型:  $\rho = 0.31$ ,  $p < .05$ , 議論型  $\rho = 0.47$ ,  $p < .001$ )。高い評価を得たエッセイには、より多くの FS が含まれていたということである。つまり、良いエッセイを書くためには、ある程度の FS を適切に使用していくことが重要であるということだろう。

タイプとの相関では議論型エッセイ評価とコロケーション使用にのみ関連性がみられたが、( $r = 0.36$ ,  $p < .01$ )、高いエッセイ評価を得るには、コロケーションを適正に使用することが必要だということである。

- (5) L2 習熟度と FS 使用の関連はない。L2 能力の各領域(一般 L2 能力、語彙サイズ、語彙力の深さ)にはそれぞれ関連がある。

スピアマンの相関係数を計算したところ、第二言語習熟度と語彙サイズ ( $\rho = 0.67$ ,  $p < .001$ )、第二言語習熟度と語彙力の深さ ( $\rho = 0.38$ ,  $p < .01$ )、語彙サイズと語彙力の深さ ( $\rho = 0.44$ ,  $p < .001$ ) にそれぞれ相関があった。つまり、第二言語能力の各領域は、並んで発達していくということがわかった。

しかしながら、これらの第二言語能力と FS 使用には関連がみられなかった。つまり、FS の使用頻度やそのタイプは、第二言語習熟度による違いはないということである。つまり、

FS の知識は他の知識と並んで増加していくのではなく、それだけに FS は習得が難しい項目であるということが出来る。

#### (6) FS 習得の困難さ

本研究では、FS が、上級レベルの学習者にとっても難しい言語項目であり、他の能力と並んである程度自動的に発達していくものではないということがわかった。

FS に関する知識を十分に活用できるようになるためには、一定レベルの L2 発達が必要である。定型性は言語に広くみられ、重要な事項であるが、その習得は容易ではない。FS 項目は、偶発的学習が起こりにくく、上級レベルでもその習得は困難を極め、発達には多くの時間と経験を要する。さらに、教授効果も現れにくい。

FS の重要性は、それが言語使用の上で効率的であり、機能的であり、適切であり、円滑なコミュニケーションに大きく役立つことにある。このような言語の特性を視点にもつ言語習得研究、FS を重視した言語指導とその効果の検証を今後進めていくことが必要である。

#### 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1. 奥脇奈津美 「ライティングにみられる定型的言語表現と L2 能力との関連性」、『都留文科大学研究紀要第 81 集』、査読無、2015 年、71 頁-83 頁、<http://trail.tsuru.ac.jp/dspace/handle/trair/700>
2. 奥脇奈津美 The development of formulaic language in a second language、『都留文科大学研究紀要第 79 集』、査読無、2014 年、43 頁-57 頁、<http://trail.tsuru.ac.jp/dspace/handle/trair/651>
3. 奥脇奈津美 The role of working memory in language learning、都留文科大学外国語教育研究センター『外国語教育研究』、査読無、Vol.7、2013 年、1 頁-28 頁
4. 奥脇奈津美 「日本人英語学習者における *that* 節補文と関係節内の時制解釈について」、『中部地区英語教育学会「紀要 42」』、査読有、2013 年、243 頁-250 頁  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009635308>

〔学会発表〕(計 2 件)

1. N. Okuwaki. The use of formulaic expressions in L2 writing. Faces of English: Theory, Practice, and Pedagogy. CAES International Conference, University of Hong Kong. 11-13 June 2015, Hong Kong.
2. N. Okuwaki. Formulaic expressions in writing of L2 learners of English. Paper presented at AILA 2014 World Congress, 10-15 August, Brisbane, Australia.

〔図書〕(計 1 件)

1. N. Okuwaki. (Accepted). Production of formulaic sequences in L2 writing by Japanese learners of English. In C. Gitsaki, M. Gobert, and H. Demirci (Eds.), *Current trends in reading, writing and visual literacy: Research perspectives*. Cambridge Scholars Publishing.

#### 6 . 研究組織

##### (1) 研究代表者

奥脇奈津美 (OKUWAKI, NATSUMI)  
都留文科大学・文学部・准教授  
研究者番号：60363884

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし